様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 5 日現在

機関番号：１２１０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2009 ～ 2011
課題番号：２１７２０１８３
研究課題名（和文）　日本人と外国人日本語話者の待遇レベル意識及び評価に関する実証的研究
研究課題名（英文）　Empirical Study on Speech Level Consciousness Among Japanese Native Speakers and Foreign Speakers of Japanese
研究代表者
藤原　智栄美　（FUJIWARA　CHIEMI）
茨城大学・留学生センター・准教授
研究者番号：40510201

研究成果の概要（和文）：
本研究においては、日本人と外国人日本語話者のコミュニケーションにおける重要な要素である待遇レベル選択を話者がいかなる意識で行っているのかを明らかにするため、敬語及び敬語使用意識、敬語選択が導かれる規定要因に関して考察を行った。一連の調査・分析により、第一言語における敬語体系や自国での敬語教育が日本語の敬語観に影響を与え、日本人と日本語学習者との相互作用が敬語イメージの具体性や敬語使用意識及び意識変容につながる傾向性が示された。

研究成果の概要（英文）：
In order to examine how conscious native and foreign speakers of Japanese are about speech level—an important element in the interaction between Japanese native speakers and foreign speakers of Japanese—this study investigated the consciousness and use of honorific language as well as the factors leading to the selection of honorific expressions by speakers. Through a series of surveys and analyses, we found that the structure of honorific language used in the native language and education in foreign speakers' home countries tends to influence their view of Japanese honorific language. Moreover, through interaction with the Japanese, foreign learners of Japanese tend to form concrete images of honorific language as well as become more conscious about its usage.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	900,000	270,000	1,170,000
２０１０年度	600,000	180,000	780,000
２０１１年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総　計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：日本語教育、第二言語習得
科研費の分科・細目：日本語教育
キーワード：異文化間コミュニケーション、待遇レベル選択、敬語、敬語使用意識、PAC 分析、自由連想項目

１．研究開始当初の背景

近年、日本では外国籍住民の増加に伴い、日本人と外国人とのコミュニケーション場面が増加している。異文化間コミュニケーションにおいて、話者間のコミュニケーション様式の相違はしばしば誤解の原因となるた

め、言語によっていかに相手との関係を調和的に保つかという言語によるラポートマネージメントの解明は、日本人と外国人との共生社会実現のための重要課題である。

日本人と外国人の接触場面に関しては、これまで社会言語学や第二言語習得研究といった研究領域において多くの分析が積み上げられてきた。日本語母語話者と日本語学習者のコミュニケーション様式については「断り」や「依頼」等の発話行為だけでなく、より広い談話レベルでの現象を捉えることを目的として、待遇レベルの実態がいかなるものかという点にも焦点が当てられ、考察が行われてきた。

日本語コミュニケーションでは、相手との関係性や会話場面のフォーマリティの度合い等から、話者は常にそれに応じた待遇レベルを選択することが求められる。しかし、第一言語に日本語のような敬語体系を持たない日本語学習者にとって、待遇レベル選択は非常に習得が難しい要素の一つであるといえる。日本人と日本語学習者の接触場面における待遇レベル選択に対する両者の期待・認識の差違による誤解を防ぐためには、従来なされてきた、会話の中で話者がいかに待遇レベルを選択しているのかという研究のみならず、「その選択がいかなる意識によって行われているのか」という点に焦点を当てた研究が重要である。日本人と外国人日本語話者の待遇レベル選択意識のメカニズムを明らかにする一手段としては、待遇レベル選択の核ともいえる「敬語観」「敬語使用意識」に対して分析・考察を行うことが有効であると考える。

２．研究の目的

本研究の目的は、日本人と外国人日本語話者のコミュニケーションにおける重要な要素である待遇レベル行動の解明の一環として、外国人日本語話者が日本語での待遇レベル選択をいかなる意識で行っているのかを明らかにするため、外国人日本語話者の敬語及び敬語使用意識について考察するとともに、日本語コミュニケーションにおいて外国日本語話者の敬語選択が導かれる規定要因を探ることである。

日本人と外国人日本語話者の待遇表現選択意識の奥深くにある構造、また異文化間コミュニケーションにおける互いの解釈及び期待のずれの有無と解釈の相違を生み出す可能性のある要因を明らかにすることは、今後さらに多言語社会へと変容し続けることが予想されている日本におけるホスト住民と外国籍住民のコミュニケーション摩擦軽減のための資料となり、意義も大きいと思われる。前述したように、敬語は、日本語学習者にとって、日本語学習項目の中で習得が困難な項目である。そうした学習者の敬語使用に関わる言語行動を導く要因及び傾向性を明らかにすることは、日本語教育的にも示唆を与え得るものと思われる。

３．研究の方法

本研究で考察対象としている敬語の「意識」は、様々な要因により影響を受け変化していくものであり、定量的研究のみではその様相を包括的に捉えることは難しい。よって、本研究では、近年、心理学的アプローチとして日本語教育にも援用されるようになった個人別態度構造分析法（Analysis of Personal Attitude Construct；以下、PAC 分析）を研究方法として採用した。PAC 分析法は、当該テーマに関する刺激(文)への連想反応、連想項目間の類似度評定、類似度距離行列によるクラスター分析、クラスターへの被検者のイメージ聴取、研究者による総合的解釈によって、調査対象者ごとにイメージ構造を分析する技法である。つまり、調査対象者が自由に自発的に項目を作り出し、それに基づいて自らが反応するため、調査対象者の自発性・自律性が最大限尊重され、比較的簡単な手続きで個々の調査対象者の内面世界について認知的・情意的観点から捉えることができる。また、PAC 分析は操作的手続きや多変量解析による分析を取り入れた客観性の高い分析法であり、少数事例を詳細に分析できるのが最大の特徴である。

本研究では、初年度より段階的に調査を進め、日本（茨城、大阪)、韓国（ソウル、釜山)、台湾（台北、台中）において調査を行った。調査の手順は以下の通りである。(1)「あなたは敬語や敬語使用に対してどんなイメージを持っていますか」という刺激文について調査協力者が自由連想した言葉やイメージを一つずつカードに記入してもらい、重要だと感じる順位を記入してもらう。(2) 自由連想の言葉同士が直感的にどの程度近いかを７段階尺度で評定してもらう。(3) この回答を基に各イメージ間の類似度距離行列を得、それをクラスター分析(ウォード法)で処理し、デンドログラム（樹状図）を作成する。(4) その結果に対する調査協力者自身の解釈をインタビューで求める。(5) 総合的解釈を行う。

PAC 分析法は、対象者の内面世界の奥深い構造を引き出す方法論であるため、研究者と対象者の信頼関係が非常に重要である。そのため、対象者に対するインタビューを始める前に、対象者に対して、研究の趣旨説明やインタビューの流れの説明に十分時間をかけるように配慮した。

４．研究成果

研究成果として、平成 22 年度は、初年度

に行った調査結果をまとめて、2010 ICJLE 世界日本語教育大会（台湾）において、口頭発表を行った。その内容については、2010 世界日本語教育大会論文集に「日本語学習者の敬語意識:PAC 分析（個人別態度構造分析法）を用いた事例研究」としてまとめられている。また、分析内容を加筆修正し、『茨城大学留学生センター紀要』９号に成果を発表した。上記の論文における分析結果は、以下の通りである。(1)敬語の複雑性といった共通のイメージ項目が表れるとともに、尊敬語・謙譲語の使用に対する心理的距離及び使用のプレッシャーといった否定的イメージが見られた、(2)日本語母語者との相互作用における経験から構築された「敬意のない敬語」といった具体的イメージが確認され、敬語使用を必ずしも敬意の表れと捉えるのではなく、敬意と敬語使用を切り離して解釈する様相が見られ、調査対象者の経験の具体性及び個別性がイメージの具体性に影響を与えるという先行研究を支持する結果が得られた、(3) 人間関係における距離の調節といった敬語の機能・役割については肯定的に評価されるとともに、自身の「印象操作・印象管理」といった儀礼的相互行為として敬語使用を位置づけている様相も明らかになった。

平成 23 年度の研究成果としては、第一に、学術雑誌『ユーラシア研究』（第８巻４号）に掲載された「韓国人日本語学習者の敬語観に関する一考察」が挙げられる。これは、前述の研究に対し、さらに調査対象者を広げて考察を深めた研究であるが、以下のような結果が得られている。まず、調査対象者の敬語・敬語話者のイメージは、知性・教養と結び付けられ、敬語自体が肯定的に捉えられる傾向があった。敬語が肯定的に捉えられているのは、韓国において敬語は家庭で教育され習得されていくものと考えられており、そうした家庭での敬語教育及び教育を受けた人についての肯定的イメージと結びついているためだと考えられる。このように、韓国での家庭における敬語教育等、日常生活に根差した韓国の社会文化的特徴とそれに対する肯定的意識が敬語観に影響を与える要因として浮かび上がった。また、調査対象者は、敬語を「日本語の敬語イメージ」としてみるというより、敬語を日本と韓国に共通して存在する、社会生活を営む上での重要な文化的産物として捉える傾向が観察された。このような敬語に対する肯定的意識には、母語である韓国語と第二言語である日本語の敬語体系の類似性が影響を与えているとともに、両者の敬語意識が相まって総体的な敬語イメージが形成されている可能性が考えられる。以上をまとめると、韓国人日本語学習者の敬語観の特徴としては、第一言語における敬語体系や自国での敬語教育が日本語の敬語観に影響を与え、日本人と日本語学習者との相互作用が敬語イメージの具体性や敬語使用意識及び意識変容につながる傾向性が示された。

第二に、台湾人日本語話者の敬語意識に関する分析結果について、『多元文化交流』第４号に発表した。調査対象者が持つ日本社会における礼儀、マナーに対する肯定的評価は、それを表す手段としての敬語に対する肯定的イメージを形成する要因となっている一方、否定的な敬語意識は、第一言語である中国語とは異なる日本語の敬語体系に対する心理的距離及びそれらの使用のプレッシャーに向けられており、日本の敬語を簡素化すべきとの意識形成に結び付いていた。インタビューにおいては、来日直後の普通体の使用頻度の高さが日本人との相互作用を通して変容していったことを、調査対象者は客観的に述べる傾向にあり、対人接触及び母語話者との相互作用が敬語のイメージ構造に影響を与えていることが示唆された。日本人との相互作用が敬語観に影響を与えるという結果は、意識の形成にはコンテクストを伴った具体的経験が大きく作用するという先行研究の結果と共通しており、本研究の結果もそれらを支持するものである。

今回の一連の研究では、日本語母語話者と外国人日本語話者との接触場面における待遇レベル選択の重要な一要因としての敬語使用意識に関して分析・考察を行った。前述したように、これまで待遇レベル選択の実態については先行研究によって分析が積み重ねられてきたが、日本語学習者の敬語意識の構造とその意識の形成要因を質的に詳細に考察した研究はほとんどないといえる。本研究において得られた分析結果は、学習者が第二言語である日本語においていかなる言語使用意識を持ちながらコミュニケーションを行っているか、また、その意識がいかなる要因から形成されているかという問いに対して、一定の知見を提示するものであり、日本語教育分野における学習者のコミュニケーション行動を視る際の基礎資料の一部として寄与し得ると考える。

今後の課題としては、さらに調査対象者を他の文化的背景を持った日本語学習者に広げていくことが考えられる。また、本研究では方法論として PAC 分析を援用した研究を行ったが、さらにデータ数を拡充し、定量的アプローチからの分析についても行っていくことが求められる。学習者の言語能力や日本滞在歴、話者の属性によって敬語観がいかに異なるか、敬語観そのものの時間的変容についても詳細に見ていく必要があるだろう。さらに、日本語学習者だけでなく、ホスト住民である日本語母語話者側の敬語意識についても詳細に分析を行い、言語コミュニケーシ

ョンにおいていかに両者の意識が相互交渉されているのかという、待遇レベル行動の包括的なメカニズムを解明するための研究に取り組む必要がある。

これからの展望として、今後多言語化する日本社会において外国籍住民との言語共生社会を構築していくために、日本語学習者のコミュニケーション様式が常に母語様式の下位に置かれるのではなく、「対等な一つの日本語のバリエーション」として捉える新たな見方を、敬語行動の規範とその変容の可能性という切り口からの考察を深めていくことによって提示していけたらと考えている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

① 藤原智栄美『台湾人日本語学習者の敬語意識：PAC 分析（個人別態度構造分析法）を用いた事例研究』 多元文化交流、第４号、 115-129、2012、査読あり
② 藤原智栄美『韓国人日本語学習者の敬語観に関する一考察』 ユーラシア研究、第８巻 4、 237-256　2011、査読あり
③ 藤原智栄美『日本語学習者の敬語意識に関する事例研究』茨城大学留学生センター紀要９号、19-31　2011 、査読あり

〔学会発表〕（計１件）

① 藤原智栄美『日本語学習者の敬語意識：PAC 分析（個人別態度構造分析法）を用いた事例研究』 2010ICJLE　世界日本語教育大会、2010 年８月１日　台湾

６．研究組織
(1)研究代表者
藤原 智栄美（FUJIWARA CHIEMI）
茨城大学・留学生センター・准教授
研究者番号：40510201